



一九九一年（平3）

24歳

幸綱（青磁社）編著。

二〇〇七年（平19）

40歳

第一文学部史学科美術史専修卒業。四月、NHK入局。番組制作局教養・教育番組ディレクターとして京都放送局配属。仕事

のため茶道、俳句を習う。

一九九七年（平9）

30歳

二月、毎日俳句大賞三位入選。その後、短歌を作り始める。

一九九九年（平11）

32歳

六月、高校生向け番組『古典への招待』制作で師・佐佐木幸綱と出会う。九月、「砂のダンス」で短歌研究新人賞次席。十二月、「心の花」入会。

二〇〇二年（平14）

35歳

七月、NHK退職。九月、貯えの続く間は働かないと決め、使われていない農家を借りて群馬県榛名山麓に転居。

二〇〇四年（平16）

37歳

篤志面接委員として少年院での短歌指導を始める（～二〇〇四）。資金が尽きて榛名山麓から東京に戻る。

二〇〇五年（平17）

38歳

「麦と砲弾」により第四八回短歌研究新人賞受賞。フリー・ディレクターとしてNHK

夏休みに東京都世田谷区に転居。

一九八〇年（昭55）

13歳

父の勤務地・大分市で育つ。三歳で大阪府

## 奥田亡羊年譜

### 奥田良胤

一九六七年（昭42）

0歳

六月五日、京都市内で誕生。本名尚良（たかよし）。祖父は俳人・俳画家の奥田雀草。父の勤務地・大分市で育つ。三歳で大阪府に転居。

一九七六年（昭51）

9歳

六月五日、京都市内で誕生。本名尚良（たかよし）。祖父は俳人・俳画家の奥田雀草。父の勤務地・大分市で育つ。三歳で大阪府に転居。

一九八七年（昭62）

20歳

所属。

早稲田大学第一文学部入学。美術研究会に

『シリーズ牧水賞の歌人たち』vol.2 「佐佐木

39歳

横浜市の中高一貫校・私立聖光学院に入学。六年間バスケット部に所属、高二で主将を務める。多くの書物を読む。

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

竹山広（）を制作。

二〇〇六年（平18）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『ばるんじ』を年内に刊行予定。

『源氏物語』全巻を講読。

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇一九年（令3）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇二一年（令6）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇二四年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇二五年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇二六年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇二七年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇二八年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇二九年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇三〇年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇三一年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇三二年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇三三年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇三四年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇三五年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇三六年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇三七年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇三八年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇三九年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇四〇年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇四一年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇四二年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇四三年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇四四年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇四五年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇四六年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇四七年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇四八年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇四九年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇五〇年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇五一年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇五二年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇五三年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇五四年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇五五年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇五六年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇五七年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇五八年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇五九年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇六〇年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇六一年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇六二年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇六三年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇六四年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇六五年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇六六年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇六七年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇六八年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇六九年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇七〇年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇七一年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇七二年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇七三年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇七四年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇七五年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇七六年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇七七年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇七八年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇七九年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇八〇年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇八一年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇八二年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇八三年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇八四年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇八五年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇八六年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇八七年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇八八年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇八九年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇九〇年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇九一年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇九二年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇九三年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇九四年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇九五年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇九六年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇九七年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇九八年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇九九年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

『二〇九〇年（令7）

年五七）。

第四歌集『虚国』を含む全歌集

# 奥田亡羊君を悼む

佐佐木幸綱

奥田亡羊君が四月十一日に亡くなつた。  
五十七歳だつた。

お父上からメールで知らせて頂いたが、  
突然のこととて、「一・三の人に知らせたばかり  
で、どう対応していいか分からぬありさ  
まで、第一歌集『亡羊』の巻頭歌「宛先も差出  
人もわからぬ叫びをひとつ預かつてい  
る」を思い浮かべるばかりだつた。

奥田君はNHKのディレクターとして私  
の前にあらわれた。一九九〇年代終わり  
だつた。彼はNHK教育テレビでディレク  
ターの仕事をしていた。「古典への招待」  
という番組で、高校生・古典愛好者がターゲットの三〇分番組だつた。万葉集、古今集、和泉式部、西行といったタイトルでしゃべつたようにおぼえている。

奥田君は、それ以前から作歌していたら  
しいが、その出会いをきっかけに「心の花」

に入会。本格的に作歌をはじめ、やがて「心の花」の編集委員として腕をふるつてくれた、雑誌にかかる細かい仕事がよくでき  
る人で、年表や図表を作る仕事も得意で、  
「心の花」の編集の仕事がどれだけ助けられ  
たか、はかりしれない。

私は彼の第一歌集『亡羊』に「跋」を書  
いているが、そこで、彼の歌の特色を次  
の三点にまとめている。「①独特な映像感  
覚」「②新しい『男歌』の可能性」「③歴史へ  
の興味」。優れた才能を失つてしまつたこ  
とが、なんども口惜しい。

亡羊さんは暗い部分があるとつい見てしま  
う人なのだ。人に深淵はある。それは仕方  
ない。だがやはり気に入らない。だから自  
分は常に暗い面も忘れず、隠さずに生きて  
いたい。ということだったのかと思う。  
宛先も差出人もわからない叫びをひとつ  
預かつてある。『亡羊』  
そしてそれは他人に対してもそうだつた  
のだろう。深淵も含めて「人の人間であ  
る。おぞましさと誇り高さを同時に認める  
こと。多分これは人間として最も切実な行  
為だ。そしてそれができる人間は多くな  
い。亡羊さんは少ない一人だつたと思う。  
歌や言葉とはその寒さと暖かさのあいだ  
からもれ出る、声にならない叫び声を拾い  
取る行為なのだろう。孤独の中でその声に  
耳をませることの困難さ。歌を続けてい  
く中で痛いほどわかつてきた。いまの自分  
はまだ全然だ。それでも少しでも近づきた  
いと思う。ぼくの手の中にも行き場のない  
叫びがひとつ、残されている気がする。

## 叫びに耳をすませて

佐佐木定綱

「金太郎飴みたいになりたいんですよ」  
と亡羊さんは言つた。なにを言つてるんだ  
この人は。「いつなんどきどこを切つても  
歌や言葉とはその寒さと暖かさのあいだ  
からもれ出る、声にならない叫び声を拾い  
取る行為なのだろう。孤独の中でその声に  
耳をませることの困難さ。歌を続けてい  
く中で痛いほどわかつてきた。いまの自分  
はまだ全然だ。それでも少しでも近づきた  
いと思う。ぼくの手の中にも行き場のない  
叫びがひとつ、残されている気がする。

『人間の暗闇』というホロコーストの本  
を読んだと話をしたら、「『S H O A』と

# 奥田亡羊の二〇首

谷岡亞紀

第一歌集『亡羊』（一九〇七年、短歌研究社刊）

宛先も差出人もわからない叫びをひとつ預かっている

自動販売機の光の繭につつまれたコーラでもいい僕たちの明日  
逆さまにビルから人が落ちてゆく顔まで見えて人はひとりだ  
板塀に人と梯子の影はあり影を残して人はゆきたり

永遠に話しつづけているだろう旅の途中は旅の話を

我的背に手を触れものを問い合わせ人みな頷きて去りてゆきたり  
自転車を燃やせば秋の青空にばーんぱーんと音がするなり  
白き雲ながるる水を跨ぐとき巨人のごとく私は老いたり

第二歌集『男歌男』（一九〇一年、短歌研究社刊）

柿の木の下に子どもはよろこべり青く小さき柿の実の降る

地獄絵を好む少女となりしより肩の輪郭すやすかに見ゆ  
牛伏の山のふもとの教室に手を挙げおらむわれの娘は

たそがれは誰かさがしに来るような霧が流れここは曳舟  
たまにしか会えない父は遠く来て子の玉入れの入らぬを見つ  
石の上に焚きし火のあと縄文の家族はここに首を寄せけむ

やさしさは遠くにひとを見るこころ屋上に降る雨に傘さす

月の夜を無蓋の貨車に運ばるる誰のいのちか桃の花盛り  
振り向けば窓のひとつに君はいてすこし遅れてわれに手を振る

子を胸に歩めばわれの知らざりしやさしさを見す人も世界も  
なにもない大地に風が吹いていた いつかぼくらがよろこびます

第三歌集『花』（一九〇一年、砂子屋書房刊）

稻妻のひらめく闇に搔きあつめ／搔きあつめ抱く人形の四肢  
おぼろなる体にいのち灯しつ／ホロンバイルに降る雪を聴く  
廃屋となりて朽ちなば／野に凄き夕映えうつす鏡のこさむ  
鯛を手に桜の尾根を下りゆく夢を見ていし父となる日に

青空に入道雲が立ちあがり何変哲のなき日なりきようは  
メリーゴーラウンドの光の渦に妻は子をしんと抱きて流れゆきたり  
前の世も来む世も離ればなれにて子を抱きつつ見るお月さま  
カニグラタン食いたがる子と食わせやるわれと夢にてあわく会いたり

「心の花」一九〇一年五月号

よるべなき思ひに櫂の手を垂れて春となる日の葦辺にねむる

「短歌研究」一九〇一年五・六月号

百メートル歩きて休み歩きてはまた休みたり空に息して  
花のごと來たりて流れゆくものをここに見送る見送られつ

# 奥田亡羊さんの死を心より悼む

伊藤一彦

あまりに悲しい追悼文である。よもや自分より若い奥田亡羊さんの追悼の文を綴ることになるとは夢にも思わなかつた。奥田さんの知性的な鋭い表情、また人なつっこく優しい表情がいくども目に浮かぶ。私たち「心の花」の者にとっても、短歌界にとつても大きな宝を失つてまことに残念である。意欲に満ちていた彼自身が何よりじつに無念だつたろう。

「心の花」五月号に奥田さんの歌が出ていたのを皆さん読まれたと思う。次は七首のうちの三首である。

- ・ よるべなき思ひに櫂の手を垂れて春となる日の葦辺にねむる
- ・ あられなき人の姿も見たりしと梅の匂へる夜更けに思ふ
- ・ さざんくわの紅く散りしく土の上に立ちてしづけく狂ふざざんくわ
- ・ よるべなき思ひに櫂の手を垂れて』の痛切な表現に胸をえぐられる。「あられな

き人」とは私は奥田さんが自身のことを詠んだものと解する。そして、紅い「さざんくわ」が「じづけく狂ふ」とは絶唱と思う。

昨年の九月二十日に奥田さんから葉書をいただきた。じつは群馬県みなかみ町から短歌の指導者を推薦して欲しいという依頼を受け、奥田さんなら理想の講師だと考えてお願いし、昨年すでに何回か指導に出かけてもらっていたのである。丁寧なお詫びの葉書だった。「みなかみ町の皆様とて

も楽しい時間をすごさせていただいています。少し体調を崩してしまい長期入院をするようになりました。年内いっぱい養生して、早めに回復してみなかみの方々にもご迷惑をおかけしないようにします。心の花

の編集もその間お休みさせていただくことになりました。ゆっくり勉強しなおす時間になりました。ゆっくり勉強しなおす時間に当たたいと思います。」心配をかけまいとする奥田さんらしい心遣いの文面である。その後、他の人からも奥田さんの病状

について聞くことがあつたが、本人も回復すると信じ治療に励んでいるという話が聞こえていた。そう信じていた矢先の四月十一日の突然の訃報だった。

奥田さんと私が初めて親しく話したのは二〇〇八年だと思う。「心の花」の歌人をインタビューしたDVD制作のため宮崎を訪ねてくれ、あれこれの話で盛り上がり。いつの間に彼を好きになつた。翌日は「心の花」の宮崎歌会にも出席して、たちまち彼のファンが増えた。

一昨年の第三歌集『花』による奥田さんの第二十七回「若山牧水賞」受賞は嬉しかつた。選考委員の一人だった佐佐木幸綱さんは、「花」のテーマと題材の豊かさを指摘し、その上で「バラエティーに富んだ題材は、型に縛られない人生を送ってきた奥田さんの経験が反映されたものだろう」と述べた。最後にみなかみ町で絵葉書になつている奥田さんらしい歌を引きたい。

・ づくねんと地蔵立ちおり花や葉をばさつと落とす桜木のした

亡羊

遺された奥様とお子様のご自愛を切にお祈りします。

# 師風への挑戦

## 矢部雅之

なお「男歌」は可能なのか、というのが彼の問題意識だったのである。

この『男歌男』の試みには、「心の花」の身内からさえ「師に対しても失礼ではないか」との声が上がった。だが、師佐佐木幸綱への厚い信頼が『男歌男』の根底にはあった。病床の奥田亡羊をその死の二日前に見舞つた時にも、そのことを懸命に彼は語っていた。『男歌男』は、巨人幸綱への彼の誠意であり、幸綱という巨大な岩壁の向こうに到達するために辿らねばならない彼の登攀の苦闘だったのだ。「失礼」の一言でそれを片付けるのは話が些か單純過ぎる。師風への挑戦もせずして何が師弟か。世代間の闇いなくして何が芸術か。

私がこの原稿を書いている今日六月五日は奥田亡羊の誕生日である。闘病中の彼にせめて誕生日までは生きて、誕生日の贈り物を受け取つて欲しい、それが私たち友人チームの願いだった。その贈り物とは、現在準備中の奥田亡羊全歌集『ぼろんじ』である。この願いは叶わなかつたが、『ぼろんじ』刊行に向けチームは引き取り組んでいた。この本が、奥田亡羊と読者の新しい出会いの契機となることを願いつつ。

私たちの前には、幸綱という巨大な師の存在があつた。その圧倒的な影響の重力圏に飲み込まれずに、歌詠みとしての自分独りでいる。奥田亡羊と私のつきあいはもう二十五年とが多い。年齢が近く、「心の花」編集部に十年間近くともに居たことが理由だったろう。だが、当人たちは、もつと別の意味で「最大の好敵手にして盟友」と互いを見なしていた。「師である佐佐木幸綱への挑戦者同士として」という意味においてである。

やがて私は、社会詠や時事詠を一切詠まず、大状況の中に自らを肉体ごと放り込み、身の周りの小状況だけに集中することで間接的に大状況を詠む、いわば「一点突破」の方法論に賭けるようになった。一方、奥田亡羊はより正面から師に向かっていくことを選んだ。師佐佐木幸綱の、そしてその向こう側にいる信綱の、「言葉に対する厚い信頼」の解体に挑むことに腹を据えたのだと思う。その過程で彼は、幸綱の代名詞「男歌」を茶化すかのような歌集『男歌男』を編みさえした。「男歌」という言葉は奥

田亡羊には「信頼と肯定の歌」を意味していた。そして、閉塞感の増す現代において

# 永遠と旅

## 横山未来子

奥田亡羊さんと初めてお会いしたのは、二〇〇二年の東京で行われた全国大会の時だったと思う。歌会の会場に着席していく時に、「はじめまして」と声をかけてくださった。私の目線にいやがんで話してくださいと、言葉遣いもとても丁寧な方だなあというのが第一印象だった。

やがてどなたかの誘いで、私の地元のコミュニティセンターが会場の同世代の勉強会に参加されるようになつた。勉強会では筑摩書房の『現代短歌全集』や仲間が出版した歌集を読み合うのだが、奥田さんの発言は、はつきりしていながらも短歌や作者への思いがこもつたあたたかいもので、いつも勉強になり、刺激を受けていた。その頃はさっぱりと剃髪されていて、初対面の時とイメージが随分違つたので驚いたことを覚えていた。

奥田さんは人を楽しませるのが好きなユーモアのある方で、奥田さんがいらっしゃる銀色のサインペンで、ていねいな文

しゃるとその場が明るくなる。いつの新年歌会だったか、当時の若手何人かで題を出しあつて作った短歌を、大きな紙に書いて発表するというアトラクションをしたのが、その企画も奥田さんが主になつて立ててくださったと思う。そういう時にきべきと物事を決めて実行できるのは、テレビディレクターという経験をお持ちだったからだろうか。本番では、進行役の奥田さんが白衣を着た「博士」になつてユーモラスに短歌を紹介し、会場が盛り上がりがつた。準備中もみんなで紙をひろげてマジックで書いてたりと、まるで文化祭のようでとても楽しかつたことを思い出す。

奥田さんが二〇〇七年に第一歌集『亡羊』を出版された時には、勉強会の仲間で読書会をし、二次会の席で歌集にサインをしてもらった。今、その『亡羊』を手にとつて眺めているが、見返しの黒い紙によ

字が書かれている。リクエストして書いてもらつた一首は、『永遠に話し続けているだろう旅の途中は旅の話を』。不思議な静けさとやすらしさのある一首で、大きな時間の流れを感じる。

最後にお会いしたのは、勉強会の仲間と井の頭公園で吟行会をした昨年の十一月だった。夏頃から企画して日程も決めていたものだった。奥田さんは治療中だったので参加は難しいのではと思っていたのだが、予定通り参加してくださった。小雨の降る中だつたが皆で一時間ほど園内をめぐり、コミュニティセンターで歌会を、カフェで第二次会をした。コロナ禍の数年間リアルに集まることが出来なかつたので、貴重な一日になつた。あの日奥田さんとご一緒にきて、本当によかつたと思っている。

奥田さんは編集部宛てに原稿でメールが届くと、全てに丁寧な返信をされていたという。私の『選歌ルーム』原稿への返信にも、いつもひと言感想を書いてくださつた。今も原稿を送る時、奥田さんだつたらどんな風に読まれるだろう、と思い、あの頃のかすかな緊張感を思い出す。

奥田さん、ありがとうございました。

## 黒板圖

## 鈴木陽美

・三階の窓辺に抱けばおぶしゃうに目を細めおりこれが世界だ

『花』

いつだつたか、奥田君が娘さんを「心の花」の編集に連れて来たことがある。東急大井町線の車中に並んで座り語らっている奥田親子に気付いた。二子玉川駅のホームで紹介されて挨拶を交わした。幸綱先生との打ち合わせがある私は先に先生宅に向かつたのだが、これから食事をするという奥田君がとても嬉しそうだったことが印象に残っている。

・眠る子に読んで聞かせる物語ふえるじな  
んぢはやさしき牡牛　　『男歌男』

手元の『男歌男』を開くと為書きのサイ

ンと共に「2017.7.26」の日付がある。この日に何があつたのか。池袋の勤労福祉会館がIKE・Bizの名でリニューアルした後の会議室で『男歌男』を読む会が開かれた。

奥田さんのほかの参加者は女性ばかり一五

名。事前に提出した一首選について評を順番に発言していくスタイルだった。わたしは引用の歌を選び、「ふえるじなんど」の物語＝ロングセラーの絵本『はなのすきなうし』を図書館から借りて持参した。この歌集にあつて『やさしき牡牛』の物語であることも何か暗示的だと、ジェンダーとか

思えば、奥田君はいつもしかるべき「世界」を胸に描いており、それを人と共有しようとする人だった。自らが生み出す短歌作品でも、「心の花」の編集メンバーとして会員に原稿を依頼する場合でも。決して手を抜くことはなく、妥協もしなかった。

そんな奥田君を頼もしいと思いつつ、いくらかの危うさも感じていた。奥田君、これまでお疲れ様でした。そして、有難う。

・自転車に乗りて自転車より速く走り去りたる男歌男　　『男歌男』

『男歌男』とは「現代を生きるちよつと

滑稽な男」とある。その装丁を依頼されたときイラストは私ではなく奥田さんご本人が描いたら面白いと思い、三センチ四方のカットを数点お願いしたところ一点がA4用紙いっぽいのロケットや地球のイラスト

が十数点出来上がつて來た。美しく大きな文字を書く人だがイラストも大らかな線で想定外に大きくて笑つてしまつた。また、どうすれば活氣のある歌会になるかを常に考えている人だった。時にはわざと悪役を演じていたようと思う。そのトリックキーな歌評が、そのボーカーフェイスが、本気なのか冗談なのかを解り難くしていた。『男歌男』とは美学と哀愁の人だと思う。掲出歌のようにすべてを残し身ひとつで駆け抜けて行つてしまつた。それは本気か冗談かどちらにしても到底受け止めきれない。

## 岸並千珠子

『男歌男』には一葉の写真も挟んである。ホタルメトロポリタンに場所を移しての食事会での集合写真だ。中央に座る奥田さん

を囲んでだれもだれもが微笑んでいる。

## 高山邦男

・逆さまにビルから人が落ちてゆく顔まで  
見えて人はひとりだ  
『亡羊』は奥田さんらしい才気が感じられる歌集だが不穏だ。そもそも木箱に花が詰め込まれている表紙の装丁は棺桶を連想させて不吉である。今までの自分を葬るというイメージだったのかかもしれない。「明日もまた何もするなど言うような私自身の夕暮れである」のようなどん底の自分や人間の原点に立っている視線がこの歌集の魅力である。冒頭の一首はいざ意味に落し込んで解釈しようとするとよく分からぬ所が多いのが印象的な作品。実景とは読めないが、暗喩のようでありつつ映像的にリアル。歌集全体を覆う暗さは、青春期特有な暗さではなく、とことん物事を突き詰めて考える奥田さんの思考のなせる業なのだと思う。そして、この歌集以降もそのとことん考え抜く思考こそが奥田さんの本領であり歌の力だったと私は考へている。

・炎天に汗拭いつつ円谷幸吉の遺書のようなる札を言う人  
『亡羊』「困るじやないか」と思つてゐる。文学にとつて、短歌にとつて、「心の花」にとつて、私にとつて、大切な人が逝つてしまつた。「心の花」に入った時から、奥田さんの広い背中を見ながら短歌を続けてきた。こののち、何を見ていいればいいのか。  
『亡羊』が出る前の年だから二〇〇六年、奥田さんと私は一日一首をメールで交換し合つていた。どちらかが題を出しての題詠だった。その時に交し合つた歌が『亡羊』にあり、私の『二丁目通信』にある。批評を交したことはないので、たくさんの歌を作ることの場であつた。

・稻妻のひらめく間に搔きあつめ搔きあつめ抱く人形の四肢  
『花』奥田さんは意外と人形好きで、展示会に何度も何度か来てくれた。ハンス・ベルメールにとつて、私にとつて、大切な人が逝つてしまつた。人形に聖性を求める私とは意見が合わずいつもケンカばかり（笑）。だけど安心して言いたいことを言える唯一の男性だつたかもしれない。

奥田さんの人形の歌はエロティックで、人形制作者としてはちょっと落ち着かない氣分になる。五体を繋ぎ合わせて出来ている人形は簡単にバラバラになり変幻自在だ。感情のない、肉体だけの存在が持つ自由奔放なエロス。奥田さんは人形の中に女性を見、女性の中に人形を探してはいたのかもしれない。私にはたどり着けない人形の歌に、私は永遠に当惑する。

返歌・両の手にちからを込めて磨きやれば人形の四肢汗ばみ始む（亜莉子）

## 藤島秀憲

## 野原亞莉子

・逆さまにビルから人が落ちてゆく顔まで  
見えて人はひとりだ  
『亡羊』は奥田さんらしい才気が感じられる歌集だが不穏だ。そもそも木箱に花が詰め込まれている表紙の装丁は棺桶を連想させて不吉である。今までの自分を葬るというイメージだったのかかもしれない。「明日もまた何もするなど言うような私自身の夕暮れである」のようなどん底の自分や人間の原点に立っている視線がこの歌集の魅力である。冒頭の一首はいざ意味に落し込んで解釈しようとするとよく分からぬ所が多いのが印象的な作品。実景とは読めないが、暗喩のようでありつつ映像的にリアル。歌集全体を覆う暗さは、青春期特有な暗さではなく、とことん物事を突き詰めて考える奥田さんの思考のなせる業なのだと思う。そして、この歌集以降もそのとことん考え抜く思考こそが奥田さんの本領であり歌の力だったと私は考へている。

・炎天に汗拭いつつ円谷幸吉の遺書のようなる札を言う人  
『亡羊』「困るじやないか」と思つてゐる。文学にとつて、短歌にとつて、「心の花」にとつて、私にとつて、大切な人が逝つてしまつた。「心の花」に入った時から、奥田さんの広い背中を見ながら短歌を続けてきた。こののち、何を見ていいればいいのか。  
『亡羊』が出る前の年だから二〇〇六年、奥田さんと私は一日一首をメールで交換し合つていた。どちらかが題を出しての題詠だった。その時に交し合つた歌が『亡羊』にあり、私の『二丁目通信』にある。批評を交したことはないので、たくさんの歌を作ることの場であつた。

・稻妻のひらめく間に搔きあつめ搔きあつめ抱く人形の四肢  
『花』奥田さんは意外と人形好きで、展示会に何度も何度か来てくれた。ハンス・ベルメールにとつて、私にとつて、大切な人が逝つてしまつた。人形に聖性を求める私とは意見が合わずいつもケンカばかり（笑）。だけど安心して言いたいことを言える唯一の男性だつたかもしれない。

奥田さんの人形の歌はエロティックで、人形制作者としてはちょっと落ち着かない気分になる。五体を繋ぎ合わせて出来ている人形は簡単にバラバラになり変幻自在だ。感情のない、肉体だけの存在が持つ自由奔放なエロス。奥田さんは人形の中に女性を見、女性の中に人形を探してはいたのかもしれない。私にはたどり着けない人形の歌に、私は永遠に当惑する。

返歌・両の手にちからを込めて磨きやれば人形の四肢汗ばみ始む（亜莉子）

# 本田一弘

・子を胸に歩めばわれの知らざりしやさしさを見す人も世界も　　『男歌男』  
「やさしさ」の塊のような人だった。「だつた」と過去形で書くのが悲しすぎる。年は私より二つ年上で、兄のような存在だった。会うといつも笑顔で優しく私に声をかけてくれた。「本田さんに触るとビリケンみたいに御利益がある」などと冗談めかして言い、体を触ってきた。選歌ルームの原稿を送るといつも丁寧なコメントを呉れたり。じつにあたたかい心、そして言葉の持ち主だった。亡くなつた後になつてから、奥田さんが残していたyoutubeの映像を見るようになつた。様々な言葉を残してくれたが、中でも次の言葉が心の底に染みてくる。「何を成したかではなくて、人は人にどれだけ優しかったかということでしか、最後自分をはかれない」(奥田亡羊さんの本棚「ドキュメントシリーズつながる本棚 第二章」)。ほんとうに優しい人だった。

# 松本実穂

・泥氷る枯野に影を散らしつつ鳥はいづへ  
に命を終ふる(「心の花」二〇二五年一月号)

昨年九月末、有志でのZoom勉強会の題詠十五首に出詠された一首で、この時から表記が旧カナになり、詠風に変化が出了た。奥田が一年かけて編んだ小見山輝遺歌集『花祭』の「たそがれの草生をわたる鳥の影鳥はいづへに命を終ふる」が元歌だ。

自身の病名を知り余命を悟つたであろう九月、小見山の歌の力を借りながら自分の境涯を俯瞰しつつ詠んだと思われる。

療養中も今年二月まで毎月勉強会に参加し、以前と変わらず饒舌、時に毒舌だった。四月に一日一首が企画され、奥田の出詠も二首あった。「奥田さんの歌を引いて返歌の形で詠む」という仲間に賛同し、毎日奥田の歌を一首引き三十首詠んだ。その半ばに計報が届いたが、歌を読み続け、仲間の花を咲かせる正念場ではなかつたのか。とはいえ時間は瞬くうちに過ぎてしまうのだろう。いま彼を悼む多くの人達もあつという間に鬼籍に入り、五代先の子孫があるのは遠い誰かが、歌を通して、かつて存在した奥田亡羊という、陰影に富んだ花ある歌人に新たな思いを馳せることだろう。

# 梅原ひろみ

・ふるさとはながさくちちであるはは  
である(蓮花寺句碑)

・生後百日目に父を亡くした雀草の父がその句に花として咲く『花』

祖父奥田雀草の句碑を淡路島に訪ねた連作「花として咲く」より。雀草は淡路出身、京都で口語自由律の俳誌を主宰した。「ふるさと」は雀草の句であり、亡羊の曾祖父母が詠まれている。曾祖父は大覺寺で学んだ華道家。『花』には自身の子を詠んだ歌も多く、奥田家五代の時間が流れている。

が、何をしている奥田亡羊、ひとり逆縁ではないか。五十七歳、これから更に大輪の花を咲かせる正念場ではなかつたのか。とはいえ時間は瞬くうちに過ぎてしまうのだろう。いま彼を悼む多くの人達もあつという間に鬼籍に入り、五代先の子孫があるのは遠い誰かが、歌を通して、かつて存在した奥田亡羊という、陰影に富んだ花ある歌人に新たな思いを馳せることだろう。

## 加古 阳

・そうすべて嘘だつたんだ／眠りゆく枯野  
の舟に花はあふれて  
初めての歌集『夜明けのニュースデスク』  
を編むとき、奥田亡羊さんに助言を頼もう  
と決めていた。ところが彼は、あまり乗り  
気ではない様子だった。曰く「私が適任か  
どうか」「男女のペアの方がやりやすい」  
等々。それまでにかかわったのはすべて女  
性の歌集で、男だとうまくないというのだ。  
しかし、歌稿の原案を渡すと、がぜん本  
気モードに入った。一昨年の八月に始めて  
歌稿の完成まで十一ヶ月。細部まで徹底し  
たやり取りを通じて鍛えられたと思う。

病を知ったのは昨年九月だったか。こん  
なに早い死は想像できなかつた。最後の  
メールは今年四月五日、死の六日前のこと  
だ。筑紫歌壇賞に決まったことを伝える  
と、間もなく祝意と期待を込めた返信が届  
いた。緩和ケアを受けつつ、懸命に書いた  
ものだろう。その気持ちが、胸に重く残る。

・なにもない大地に風が吹いていた いつ  
かぼくらがよろこびますように『男歌男』  
『花』  
亡羊さんが亡くなられてから一月半が過  
ぎたが、まだ呆然としている。癌のことは  
知っていたが、こんなに早く亡くなられる  
とは思つていなかつたからだ。

『亡羊』『男歌男』『花』の三冊の歌集を読  
み返しつつ、涙がこみ上げてきている。亡  
羊さんの声とともに一首一首が心の奥深く  
に流れ込んでくるのである。

初めて出会つてから約四半世紀。「心の  
花」の歌会や勉強会、編集などの場で沢山  
の時間を共に過ごしてきた。

東京歌会の筑波山吟行会の際には、下見  
のために山頂まで登り、ともに関東平野を  
一望した。東日本大震災の時に水戸に在住  
していた私を心配し、「うちに避難してく  
ださい」と電話をくださつたこともあつた。  
今、亡羊さんと同じ時代を生きることが  
できた幸いを深く噛みしめている。

・宛先も差出人もわからない叫びをひとつ  
預かっている  
『亡羊』  
佐佐木幸綱研究室で初めて会つた時、お  
互い早稲田の学生だった。まだ「亡羊」で  
はなく、連絡先を渡されたメモの「奥田尚  
良」の筆跡そのものが第一印象。「心の花」  
入会直後に「まだ原稿用紙がない」と電話  
があり、お互いの実家が至近だったので池  
上線の雪が谷大塚駅で待ち合せた。ホー  
ムに現れるなり地元の格式高いパーティス  
リーのケーキを「御礼です」と手渡されて、  
过剩なうやうやしさに戸惑つた。牧水賞受  
賞で宮崎に来た時は、高校訪問に同行。「生  
徒達が体育館の冷たい床に座つているのに  
高い所から話せない」と舞台を降りて立つ  
たまま話をされた。十年以上前、「松尾あ  
つゆきの手に入る資料すべて。ひとまず」  
亡羊」と分厚いコピーの束が突然送られ  
てきた。頼んでもいいのに何が「ひとまず」  
だつたのか、聞きそびれたままになつた。

## 田中拓也

## 大口玲子

## 【追悼録】

西澤京子　奥田亡羊さんに初めてお会いしたのは、雑司ヶ谷地域文化創造館にて「窪田空穂のいのちの歌を読む」という講座が開かれた時でした。今から十二年前のことです。空穂の名前は知っていたのですが、どんな歌人かはよくわからず、講座に参加したいと思いました。

『冬木原』の長歌を読んでいた時、亡羊さんは感極まり声をつまらせました。まだよく理解できない私でしたが、激しい挽歌だと感じました。四回だけの講座の最終回に、亡羊さんと受講者のみなさ

んで雑司ヶ谷霊園の空穂のお墓をお参りしました。確かこの時もお墓の前で涙ぐまれていたような気がします。帰り道、初めて会話を交わしたように覚えていています。

「短歌は自分を助けてくれるし、発見があります。自分がいかにも知らなかつたかと気づかせてくれます。人に贈ることも良いですね」とおっしゃっていました。こんなに早く他界するとは思つ

ても楽しみでした。上の句、下の句、切れ、比喩、倒置法など基本的なことを一から学び、その後は歌会に初めてチャレンジしました。十二名くらいの小さな歌会でしたが、亡羊さんの短歌に対する情熱に引き込まれ、歌会は五十回になるまで続きました。この場で私は短歌を詠む基本の力を育てて頂いたと思います。

す。

谷ちえみ 奥田さんと初めてお話をさせていただいたのは、東京歌会の第二次会、中野の赤ひょうたんでだつたと記憶している。『嵐が丘』のヒースクリフについて語られて、こちらはその熱っぽさに気圧されて聞くばかりだった。

「心の花」一五〇〇号記念号で

本田一弘論の執筆の機会をいただいたとき、奥田さんは歌集を持ち合わせているか気にかけてくださ

り、二冊お借りした。表には表れ

ないこのようなお気づかい、橋渡

しの役割やお骨折りを、ていねい

に、確実に、気持ちよくなさる方

だった。実はお借りしたうちの一

冊にコーヒーをこぼしてしまった

のだが、運よくビニールのカバー

がかけてある物だったので、きれ

いにふき取り何も言わずに返し

した。お伝えしたところできつと

「そうでしたか、気づきませんでし

たよ」と言つてくださつたと思う。あるいは、いたずらっぽく「やつ

ぱり」とおっしゃつただろうか。

一〇二三年、心の花賞奥田亡羊

賞をいただいた際の賞品は、昭和十五年発行の『新風十人』であつた。

この古びた本は本棚の中から

最長老の本として見守つてくれて

いるように思つてゐる。

今も歌会にひょっこりお見えに

なるような気がしてならない。あ

まりに早すぎて悔やまれる。心よ

りご冥福をお祈り申し上げます。

坂口弘 奥田亡羊氏の突然の訃報

に接し、驚愕しました。肺がんを

患つていたとは全く知りませんで

した。まだ五十七歳で働き盛りの

ピークといつてよい年齢でしょ

う。ご家族や同人の皆様の御悲嘆

はいかばかりか、深く御推察し、

お慰め申し上げます。

かつて心の花賞で応募作品を奥

田氏に採つて戴いたことがある私

は、氏に特別の親しみを抱いてお

りました。彼の死を深く悼み、御

冥福をここよりお祈り申し上げる次第です。

原口嘉代子 奥田亡羊さんが四月十一日に逝去されたと朝日新聞の

訃報欄が伝えていた。五十七歳。

今後も大いに活躍なさる方だつた。私が「心の花」に入会したば

かりの二〇〇四年、東京歌会の新

年歌会で拙歌が一位になつた。

五票の歌が三首あり、挙手によつて決まつた。選んでくださつた五

人の批評は好意的だつたが、やお

ら奥田さんが手をあげ、三句「思

はずも」がよくないと言つてくだ

さつた。それから約二十年、私は

この歌について考え続け、昨年上

梓した第一歌集『飛鳥』に「父の

夢見しとふ人にせき込みて元氣で

したかと問ひてしまへり」と改作

し収載した。奥田さんにいかが

ですかとお聞きしたかったけれど、すでに入院されていて果たせなかつた。二十年前のこの一首に

より宇都宮さんが由幾先生に私の

木耀会入会のご許可を頂いてくだ

さつたことを後に伺い、忘れられ

ない歌ともなつたのだった。

一昨年の「心の花」一五〇〇号

記念号の特集の一企画「こんなと

ころに信綱歌碑」の実現に背中を

押してくださつたのは奥田さんと

高山邦男さんだつた。原稿締切間

際に、奈良県宇陀市のかぎ

ろひの丘の柿本人麻呂歌碑を実見

するために急遽現地へ行つたこと

も思い出されるのである。

奥田亡羊さんのご冥福を心から

お祈り申しあげます。

佐藤博之 奥田亡羊さんが闘病の

末、五十七歳の若さで亡くなられ

た。素晴らしい歌集や編集部内で

の献身的なご活躍、そしてそのお

人柄を振り返ると、この早すぎる

お別れが残念でならない。

近年は歌会前の講話や歌会後の

二次会で、東京歌会をいかに盛り

上げていくかについて熱弁される

姿が忘れられない。奥田さんの拝

聴した多様な腹案については残念

ながらその多くが実現を果たせないままであるが、私がWe bリモート歌会で企画した三浦半島短

歌合宿などの取り組みについて、

心の花の歌会をともに盛り上げて

いく企画として心強く応援して頂

いた。私自身と、同様の気持ちを持つ仲間たちで、それぞれの歌会を盛り上げることが亡羊さんへの供養の一つと信じて、今後一層努めていきたい。

美帆シボ 「心の花」に入会してから、帰国のおり東京歌会に参加した。あれは初めて参加した時だつた。私の発言に鋭い批判をした青年がいた。きりつとした佇まいで、近寄りがたい雰囲気があつた。奥田亡羊という名を知り、彼の歌に注目するようになった。

それから十年以上経つても、最初の印象が強烈だつたせいか、私が短歌仲間とパリで発行している「フランス短歌4号」に原稿を依頼したくても、躊躇してしまつた。頼りの綱は梅原ひろみさんだつた。彼女は「フランス短歌2号」の一首評に亡羊さんの歌集『花』の連作「切り石」から一首

を紹介した。

・清貧を洗いて太き月光の中庭にさすル・トロネ修道院

連作の始めに「高校生自立支援として埼玉県北部の定時制高校をまるわる」との一文があるという。

若山牧水賞を受賞したこの歌集を入手できなかつた私は梅原さんへの評が良い手引きになり、亡羊さんに原稿依頼の仲介をお願いした。

お陰で、二〇二四年に発行した「フランス短歌4号」には亡羊さんによる3号の総評が掲載され

た。全作品を丁寧に読んで下さったことが感じられ、短歌仲間への励ましになつた。自分が発表した十二首から亡羊さんが取り上げた一首とその評を読んで、以前は短歌を辞めたいと言つていた人の顔が輝き、今も短歌を続けている。

昨年六月の佐佐木信綱祭に参加する予定を組んだ私は久々に亡羊さんとの再会を期待して、その頃お仕事が入つていて。少年院での

短歌指導や外国名の生徒が多い定期制高校のお話を聞きたかった。

心からご冥福をお祈りいたします。

笠巻睦 「ちはやふる神田沙也加

が飛んだ夜の雪の白さに咲く梨の花」二〇二二年四月東京歌会に私が出した歌だ。歌会ですと票が入らず、どうして伝わらないのだろうと悩み続けていたのだが、この歌に二票が入つた。奥田さんと岸並さんだつた。奥田さんは大変美しい歌だと思いますと言つてくださいました。心折れそうだつた私は俄然やれる気がしてきた。奥田さんが貴重な一票を投じて下さつた。心折れそうだつた私はなら百票分だ。どれだけ励まされたかわからない。心から感謝しています。早すぎやしないか。

松澤誠 編集委員をされていた

奥田亡羊さんが亡くなられたとお聞きして、兎に角びっくりしてしまつた。体調を崩されており、「暫く編集作業からは外れます」とお仕事が入つてから、きつてご連絡をいただいてから、きつてご内復帰されるだろうとばか

り思つていたので、大変残念な思いです。振り返れば、心の花の

一五〇〇号記念号においては、完

成した書籍を事前に確認したいとお話で、二〇二三年九月二十九日にお渡ししたのが、

号を三冊直接お渡ししたのが、

最初で最後のお顔を拝見しながらの、やり取りになつてしまいまし

た。またその際にご丁寧に手土産まで頂戴し、弊社の文具売店にも

寄られ、万年筆のペン先調整をさ

れたとその後メールにて、ご報告

もいただきました。私のような協

力業者の人間に對しても、常に、

丁寧で優しく接していただきメー

ル等でも感謝のお言葉をいただ

いていた事が忘れられません。本當

に色々と有難う御座いました。天

国でも創作にお勧めください。ご

冥福を心よりお祈り致します。

(松澤さんは株式会社オカモトヤ

の社員で、前任の小林修二さんから引き継いで「心の花」誌の発行に当たつておられます。奥山かほる 奥田さんの死を受けとめられない。私は二〇二一年に幸せにも、歌集『安息角』へのたいへん懇切な解説を書いて頂いた。その後書きに、宗教家のような気を放つておられる奥田さん、と記しているが、私はなぜそんなことを書いたのか。今思うと、世を超越しておられるような印象の私なりの表現だったのかかもしれない。病気になられてからのYouTubeでの発信の様子も又並々ならず落ち着いていて、死への恐れの気配は感じられなかつた。

病気の事を最初に伺つた時、なにか元気になるお見舞いを差し上げたい、と知恵をしぶり、歌集の出版祝いに友人がくれて嬉しかつたまえはらの鰻おこわ、「これだ！」と思いついてお送りした所、「とてても美味しかつたです」と円谷幸吉のようなお返事が来て、ヒヤリ

としたのはつい半年前。

奥田さんは困つてゐる人がいると、惜しみなく助け舟を出してくれる熱血漢で、私も色々な親切を頂いた。私は私で、奥田さんは忙しそうなので、それも高じて辞めてしまうのではないか、と心配してしまった。

奥田さんは困つてゐる人がいると、惜しみなく助け舟を出してくれる熱血漢で、私も色々な親切を頂いた。私は私で、奥田さんは忙しそうなので、それも高じて辞めてしまうのではないか、と心配してしまった。

一度もお目にかかつたこともなく、「大分歌会だより」など、メールを通してだけの、尊敬する編集委員かつ歌人でした。

「心の花」編集部のメールを通して、どんなメールにも、必ず受領しく、「私の自慢」などの執筆を依頼された折には、煩雑な写真の合成に手を尽くしていました。

「心の花」一五〇〇号記念号で、木下利玄の別府での一首の執筆を担当することになり、メールを通して何度、疑問や質問などをしたことでしょうか。

そんな時も、メールの最後には、「私の自慢」で少し竹井さんのことがわかつてきた矢先、少し残念です：全国大会などでお目にかかるれるのを楽しみにしておりました。

十一月号に「私の自慢」が掲載されたときに、合成写真のお札と、奥田さんのお弟子さん・新貝友子さんの大分歌会入会についてのメールを差し上げましたが、返信はいただけませんでした。

愛媛羊歩ちゃんが群馬の名門女子高に合格されたと聞き、卒業生の金井美恵子が好きだった私は、手持ちの詩集を入学祝いにとお渡しました、「僕が先に読んでから」と言われたのがまるで教育パパのようであ面白かったのも、そんな昔の話ではない。

華のような奥田さんの存在の、その歌と文章のファンだった。奥田さん喪失の傷みは、癒える事がないだろう。

それが記念号に相応しいかを打診するメールをお送りした折も、すぐには「これが良いでしよう」との返信があり、「心の花」の編集上の決まりに沿い手直し箇所を指摘され、松本実穂さんとも密に連絡していたとき、完成原稿を仕上げ

が大きい期待された歌人の早すぎることで逝去は、あまりにも衝撃的でした。

ささらに記念座談会でも、松本さ

んと感想を述べていただきました。

その後、恐れ多くも「私の自慢」

の執筆を依頼された折には、煩雑な写真の合成に手を尽くしていました。

だきました。

しかし、ちょうどその時期は、

体調不良で編集委員を退任された旨の返信に、その都度温かい励ましのお言葉が添えられていました。

またまた「心の花」

号

なりました。

十二月号に「私の自慢」が掲載されたときに、合成写真のお札と、奥田さんのお弟子さん・新貝友子さんの大分歌会入会についてのメールを差し上げましたが、返信はいただけませんでした。

その後の奥田さんの体調が氣に

なりながら、「木下利玄没後百年」を記念する三月号に、図らずも歌集『紅玉』論を執筆することになり、掲載された折には講評いただけたると、メールを差し上げようとした。躊躇していた矢先の訃報通知でした。

今年の十一月の宮崎での全国大会で、お目にかかるのを楽しみにしていた夢は、一瞬にして消えてしましました。

短い期間ではありましたか、  
ひよんなことから「木下利玄」の  
歌評を通して、メールでご指導い  
ただいた「心の花」一會員として、  
大分の地から、ご冥福を心よりお  
祈りいたします。

**峰尾碧** 藪蛇を書かなければならぬが、奥田さんは初めデウスエクスマキーナとして現れた。二〇〇〇年の先生の文部大臣賞受賞祝賀会の『アニマ』『逆旅』の書評スピーチを大間違いで幾人かに『アニマ』のみ頼んでしまった。

手だと震えんばかりだった奥田さんが急遽その場でそれは見事な『逆旅』評に切り替えてくれた。同じく余すところなき『逆旅』

評に替えてくれた大口さん。二人の底力と歌への覚悟、幸綱作への思いの深さに震撼とした。先生が奥田亡羊は裸になつて言ってくれた。あれが批評だ、と言われた。が、

あろうことか、あれほど共鳴して  
聞いたスピーチを引用歌の一首、  
なめらかな肌だったつけ若草の  
妻ときめてたかもしけぬ掌は  
の他何も覚えていない。忘れてし  
まつた幻の批評。どなたか覚えて  
いなかったことを思ふ。

いらっしゃる方はいませんか

人を喜ばせるのが好きだった。樂しそうに彫大な心の花の仕事を仕掛け、こなした。啓蒙家でよく

熱心に本を勧めてくれた。最近のは読んだ中で一番凄い本だという

『嘆異抄』だった。卓越した感性と知性、身についた法外な情報が反響しあう輻輳の歌は奥田さん自

身のように多彩で魅力的だ。淵みのある強烈なノスタルジアに痺れ

る。お子さんの誕生の歌の透明な  
美しさは忘れられない。最後に会つ

美しいは忘れられない 最後に会った時後ろから、相変わらずお美し

いといいざま肩をガッと掴んで振り向きもしないで前方へ駆けて

行つた。その姿が真葛原を吹き分  
けてゆく、疾風のようだ後ろから

いてゆく病屋のようで微かにうきて鮮やかに駆け抜けていった奥田

さんそのものに思えてならない。

高嶋邦男 晴日ひ当たるやうれど、会つたのは黒岩剛仁歌集『天機』の出版記念会。三一二

の出版記念会の時でした。三十年  
ぐらい前だと思いますが正確には

分かりません。

たのでたぶんNHKを退社し隠遁生活を送つて、と頃なつてはな、

生活を送っていか頃なのではないかと思います。まだ年齢も若く下

働き的に二次会の幹事をされていたのではないでしようか。

学生時代からの友人である黒岩の会だから出席したので、二次会では少ししゃべらせてもらいたいと思つ

初対面だったので、ただの変な人と  
思われたのかもしれません。

その後も自分の信念に確信を  
持つて生きている人だったので、特  
に短歌の創作に関してはありがた  
い示唆をたくさんいただきました。

また、若いときの亡先生は何  
となく自殺顔をしているとぼくは  
思っていました。何故かというと  
身近で自殺した何人かの人と共通  
の雰囲気を持つていたからです。  
今考えてみると、それは彼の才能  
から生じる狂気のようなものだっ  
たのかもしれません。

その後、堀越貴乃さんと結婚さ  
れてからはそんな気配がなくなり  
良かつたと思つていました。女性  
の力は偉大です。

亡羊さんのXによると最後は頭  
を剃り坊主頭になられたようで  
す。再度坊主頭になるということ  
に意味は無いのかもしれません

が、何となく象徴的で、再生のための出発のように感じています。自分より若い人の死は痛ましいですが、彼は彼の人生を全うしたと思います。病気の発覚後の所作振る舞いは泰然自若でした。

こうした感想は若すぎる彼の死を納得するための方便に過ぎないのかもしれません。

田中薰　さようなら、奥田亡羊。

田中薰　昨年十月、佐佐木先生宅での校正日にお会いした。それが最後になるとは、ゆめ思ひなかつた。作業中の私たちの傍らで淡淡と朋子さんと話されている声が時折聞こえたが、肺癌治療の為の編集実務の引継ぎだったことは後で知つた。

稀有名な才能の歌人だつたと思う。最初の印象は、鋭くて少し怖いくらいの若者。そんな奥田さんは何故か関る機会が多かつた。全国大会では一度ならず評者の相方として組んだ。東京歌会の司会でもご一緒したが、ある時、互い

の進行の役目も忘れて意見が衝突。隣でその様子を見ておられた

先生が「君たち仲が悪いのか」と笑いながら仰り、皆も笑つた事が今は懐かしく思い出される。

矢部雅之さんの日本歌人クラブ新人賞の受賞式の後、十人ほどで茶房に寄つた折のことも印象深い。

並んで座る矢部、奥田両氏に「お答え」を持つ作品群一を照らしてい

二人は歌の勉強が心底お好きなんでしょうね」と軽口気味の愚問を投げかけると両者、「はい」と即答。信綱の「お勉強なさいませ」という教え通りの二俊英は成るべくして、と改めて感じた。

一昨年、「心の花」一五〇〇号の責任者として奥田さんは尽力されたが、掲載された拙文中の信綱の言葉に胸を衝かれた、と仰る。門人・梅野満雄の一周年忌に、夫人宛に送られた書簡の一節である。「君の遠逝は、ただただ歎かはしい。しかし、思へば、短い人の一生において、芸術のみは久遠の命を誇り得る。」亡き弟子への信綱

の此の語りかけに感動したと。奥田さんはこの時、僅か一年半後の自身の死など、微塵も考えなかつたろう。が、今思えば恰も、近い其の日を予知した様な感受である。

信綱の言葉はそのまま、奥田さんの遺した歌「勉強」に裏打ちされた秀でた表現力と独特的感性、大切だと力説されていた「怖さ」を持つ作品群一を照らしてい

ると思わずにはいられない。

経塚朋子　数年前、「経塚さん、

高野山に行つてきましたよ。」奥田さんはにこにこしながら告げられました。不調法な私は「まあ」と、つられてにこにこして、そのまま会話を終わってしまいました。

なぜ高野山かというと、五年前、私が「高野」という高野山の連作で「心の花賞」をいただいたからです。その折、奥田さんには選考委員として評を賜りました。作品だけでなく、息子を亡くして

青木春枝　ご冥福をお祈りします。

ず応募していたことも評価してくださいました。あの時なぜもつと

踏み込んで、高野山のどこがどうよかつたのかお尋ねしなかつたのか。ぼんやりとした私の方が生き残つてしましました。

二十数年前でしようか。入会し

たての亡羊さんに初めてお目にかかりたのは、東京歌会でした。「奥田です。」と礼儀正しくご挨拶され、以降、転居なつていた時期を除いて、ずっと歌会で御一緒させていただきました。歌壇でご活躍され、ご結婚、一人子の父となられ、終止符が打たれるまで、早送りのよう人生を遠く眩しく拝見しております。

誰もが想像もしなかつた早すぎ

る死です。遺された三歌集、御存命であればその先に何冊が加えられたのでしょうか。惜しむ気持ちはありません。

ご逝去の報に接して、これほど早くに信じられなかつた。歌人としてまだ若く、やりたい仕事も多かつたはずと思うといかにも残念で悲しい。

亡羊さんに会つたのは、第一歌集『亡羊』を出版して間もなくのながらみ書房のパーティだつた。

二次会でお話しして、お互いの歌集を送ることとなつた。『亡羊』は若さと意欲の溢れている歌集だつた。

二〇〇四年五月の東京歌会はゲストに寺井龍哉氏がいらした。その二次会で、寺井氏を開み亡羊さんや、加古陽さんたちと和歌や万葉仮名や西洋の詩との違いや、母音の多い和語と子音の多い欧州の韻律の違いなど、話題はあちこちに飛び、とても興味深く、楽しいひとときを過ごした。帰りは方向が同じだったので、神保町で下車するまで歌会の話などをした。とてもお元気だつた。わずか一年前のことだ。何故このような悲報となるところがある後輩でもあつた。

なつたのだろう。決して個人的に親しかつたわけではないが、話題が豊富で、教養があり、内容も充実していく、楽しいひとときをす

ごせる歌人だつた。もうすこし短歌の話などをしたかった。最後に、『短歌研究』五・六月号に掲載さ

れていた「露の花」より一首をひいて哀悼の意を捧げたいと思う。

椅子にやすみ椅子にやすみて下りゆくそよ風のぼり来る春の坂

**大野道夫** 奥田亡羊くんは誰もが認めるハンサムで有能な人であつた。たとえばDVD「未來へ伝える言葉」「心の花」創刊一一〇年記念インタビュー・朗読集

(二〇〇八年)は奥田くんの力作(二〇〇八年)は奥田くんの力作

またフランスのマルチークの国際短歌フェスティバル(二〇一五)へご一緒したとき、「子どもたちが、お父さんが何か偉いことをしているように思つていて」と言つたことや複数回結婚と離婚珍しく父親の顔を覗かせていた事も心に残つた。その時のシンボジウムでも奥田くんは「卓上の逆光線にころがして卵と遊ぶわれにふるるな(築地正子)」に対して鋭い発言をし、私はそれを横から見ていましたが、そのような機会もも

しかしま先輩たちにはとても礼儀正しく、かつ「大野さん!○○○○?!」のような鋭い突っ込みも時にする後輩でもあつた。

そんな奥田くんの思い出として

は、短歌研究新人賞授賞式のスピーチ(二〇〇五)で、自分は一九六七年六月五日に生まれたが、この日は第三次中東戦争(六

日間戦争)が勃発した日であり、

そのことを忘れずに生きていきたい、と言つたことがとても印象に残つている。

またフランスのマルチークの国際短歌フェスティバル(二〇一五)

へご一緒したとき、「子どもたちが、お父さんが何か偉いことをしているように思つていて」と言つたことや複数回結婚と離婚珍しく父親の顔を覗かせていた事も心に残つた。その時のシンボジ

ウムでも奥田くんは「卓上の逆光線にころがして卵と遊ぶわれにふるるな(築地正子)」に対して鋭い発言をし、私はそれを横から見ていましたが、そのような機会もも

う永久に失なわれてしまつたのである。

**桐谷文子**

二〇一八年より五年ほど奥田亡羊氏に講師として甲府な

ぎの会にいらしていただきました。

毎回丁寧にご準備をしていただ

き、的確なコメントにより一首一首が輝いてまいりました。特に言葉の選び方は、納得のできる具体的なアドバイスをくださいまし

た。加えて奥田マジックとも言え

る穏やかな語り口と物腰の柔らか

さにも惹かれ会員一同すぐにファンになりましたことはいうまでも

あります。

個人的には、拙歌集の授賞式に

甲府まで駆けつけてくださり、忌憚のないご批評をいただきまし

こと、山梨県歌人協会の冊子『奈

麻余美』に素晴らしい歌集評を書いてくださいました事など感謝に

いたのですが、そのような機会もも

諸事情で講師をお招きすることをしばらくお休みせざるを得なくなりましたのが残念でなりません。あまりにも突然の発病とご逝去に呆然とするばかりですが、五年間のお導きで得られました作歌や読み方を今後に活かせますよう努めてまいりたいと思います。

・なにもない大地に風が吹いてい

た いつかぼくらがよろこびますように

『男歌男』

**武藤義哉** 奥田亡羊さんにはいろ

いろな場面で大変お世話になりました。私が東京歌会幹事の当時は

何かと個人的にアドバイスをいた

だき大変助かりましたし、拙歌集

に關しても出版後様々な形でご支援いただきました。あまりに早いご逝去、悲しい限りです。心からご冥福をお祈りいたします。

**山本陽子** 奥田亡羊さんが生前に

編まれた三歌集を読み返して、青空の歌が多いな、と新鮮に感じた。

自分が初めて参加した東京歌会は、中野サンプラザで夜開かれ

ており、当時司会者だった奥田さんに、勝手に夜のイメージを抱いてしまっていたせいだろう。二次会の赤ひょうたんで、奥田さんに「あなたの作品は整っているね。でもそういう人は案外、伸びないんだよ」と言われた。学生短歌会のような空気感だった。

・奥村土牛の城を見上げる絵の奥

のあんなところに青空がある

『亡羊』

・穴を掘る青空高く土を放る心を

放る気持ちよくなる

『花』

・春の日をひねもす蝶は青空に／

ぶつかりながら突き抜けていた

『花』

奥村土牛の城の歌は「心の花」

一二九二号（平成十八年六月号）初出である。選者小紋潤氏の特

選の一首であり、また、「今月の十五首（佐佐木幸綱・選）」欄の

一首に選ばれていた。芸術を鑑賞

した時の感動はこんな風に詠めば

よいのかと目の醒める思いで歌と

評を読み、ときめいた。そのこと

を奥田さんに伝えると、奥田さんは大学で美術史を学んでいたこと

を話してくれた。実は、奥田さんは同じ大学なのだが、学部と学

年が異なる。仏像ガールに人気だった文学部の「日本彫刻史」という講義を他学部聴講したことを

奥田さんに話すと、奥田さんは「それ、僕の先生の講義だ」と言つて

いた。

奥村土牛の「城」は、東京渋谷の山種美術館に収蔵されている。

